

英国におけるオーラルヒストリー(1) フリーランスのオーラルヒストリアンたちとの出会い

UMEZAKI, Osamu / 梅崎, 修

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン : 法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies

(巻 / Volume)

12

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

130

(発行年 / Year)

2014-09

〈資料紹介〉

英国におけるオーラルヒストリー (1)

フリーランスのオーラルヒストリアンたちとの出会い

法政大学キャリアデザイン学部准教授 梅崎 修

1 調査の目的

本稿と続く別稿では、英国におけるオーラルヒストリー研究、または市民団体によるオーラルヒストリー活動を紹介します。むろん、英国は米国と並んでオーラルヒストリーの先進地域であるので、一回の調査報告で英国のオーラルヒストリー研究や活動の全てを紹介することは不可能であろう。研究の紹介に関しては、ポール・トンプソンの主著、『記憶から歴史へ—オーラルヒストリーの世界』(Thompson, 2000)が翻訳され、日本の研究者にもその全貌が明らかになってきたが、市民が行うオーラルヒストリー・プロジェクトや博物館などのオーラルヒストリーの保存や展示については十分な情報が伝わっていない。

オーラルヒストリーは、研究者だけに独占されている閉じた手法ではなく、広く一般市民にも開かれた手法である。言い換えれば、フリーランスによるオーラルヒストリー・プロジェクトが活発であることが、オーラルヒストリー研究の幅広いすそ野を作っていると言えよう。日本ではあまり知られていない、それらの活動を紹介することは、日本におけるオーラルヒストリー発展のためにも意義があると考えられる。

私は、2013年4月から2014年3月まで、法政大学の在外研究制度を利用して英国ロンドンに滞在した。1年間の滞在中、大学や博物館などを訪問し、研究者やフリーランスのオーラルヒストリアンとの交流の機会を持った。日本では、英国

におけるオーラルヒストリーのアーカイブ化とフリーランスのオーラルヒストリーの活動について紹介されることが少ないので、現状報告をしたい。報告内容は多岐にわたるので、本稿ではフリーランスのオーラルヒストリアンたちの活動を紹介します、続く別号(2)においてアーカイブ化について報告する予定である。

英国のオーラルヒストリーは、各地・各大学で行われているので、その全部を訪問することは、1年間では不可能である。英国のオーラルヒストリーの活発な活動を知るには、Oral History Society (OHS 英国オーラルヒストリー学会)のホームページが役立つ。このホームページでは、他の学会と同じように学会大会や学会雑誌などの研究情報が紹介されているが、それ以外にもオーラルヒストリアンに役立つ情報が公開されている。オーラルヒストリー・プロジェクトを始める際の法律問題、資金獲得、インタビュー方法、および編集・公開方法がガイダンスとして公開されている。まず、学会が定期的に行っているオーラルヒストリーの短期訓練プログラムが紹介されており、学会員に限らず、参加申し込みができるようになっている。さらに、地域ネットワークのページが充実しており、各地域を選択すれば、各地域においてハブ的な役割を果たす組織や人物が紹介されている。加えて、イベントのコーナーでは、各地で行われているオーラルヒストリーのイベントが紹介されている。学術研究会もあるが、フリーランスのオーラルヒストリアンが企画

した市民参加のイベントが紹介されている。私は、まずこのイベント案内を見て驚いたのである。様々なイベント案内を見ると、研究者以外の人々による地域活動としてオーラルヒストリーが行われていることがわかる。つまり、英国におけるコミュニティ・オーラルヒストリーの分厚い蓄積を理解できるのである。

なお、英国のオーラルヒストリーを理解するには、先ほど紹介したトンプソンの著作と、彼の学生であった酒井順子氏が日本人向けに執筆したテキスト『市民のオーラル・ヒストリー』が参考になる。ただし、英国のオーラルヒストリーの広がりを理解すれば、それだけでは十分な情報ではないとも言える。海外のオーラルヒストリーの紹介に関しては、私が、研究仲間の田口和雄氏と行った、米国におけるオーラルヒストリー・センターの紹介がある（梅崎・田口（2012, 2013, 2014）、田口・梅崎（2012, 2013a, 2013b, 2014））。ただし、これら一連の調査は、米国が対象であり、主に大学におけるオーラルヒストリーのアーカイブ化についての視察報告であった。確かにわれわれは米国における進んだ研究基盤を知ることができる。しかし、市民団体によるオーラルヒストリー活動については、訪問先が主に大学であったので、十分な調査・紹介ができていない。そこで英国では、非アカデミシヤンのオーラルヒストリーにも焦点を当てて紹介したい。

なお、筆者がロンドンに滞在していた関係でロンドンおよびロンドン近郊の活動を中心に紹介することをあらかじめ記しておく。

2 フリーランスのオーラルヒストリアン

英国に滞在し、第一に訪問したかったのは、大英図書館のオーラルヒストリーであり、研究者としてお会いしたかったのはトンプソン氏であった。この二つは、思いを遂げることができたが（別稿で紹介したい）、先述したようにOHSのホームページを見ながら感心したのは、オーラルヒス

トリー・イベントの多さであった。私のような研究者にとっては、オーラルヒストリーの実施は、研究資料の収集が第一になる。ところが、フリーランスのオーラルヒストリアンの場合、オーラルヒストリーには別の意味づけがある。地域コミュニティのため、家族のため、など目的は様々であろうが、これらの活動を検討することは、歴史と社会の関係を考えるヒントがある。

本稿では、私が参加・調査したフリーランスのオーラルヒストリアンが実施した二つのオーラルヒストリー・プロジェクトと一つの勉強会を紹介したい。

(1) An Oral History of Speaker's Corner

はじめに紹介するのは、スピーカーズ・コーナーのオーラルヒストリー・プロジェクトである。スピーカーズ・コーナーとは、ロンドンのハイドパークの一角にある場所であり、この場所では、自分の主張を語ることが許されている。英国王室への批判と英国政府の転覆以外ならば、いかなる話題についても、法的を気にすることなく語ることができる。自由な論説の場として19世紀後半から現在まで続いている。この場は、対話による民主主義や自由主義の思想に関して象徴的な意味を持っていると言えよう。例えば、英国の作家George Orwellは1945年に“The Freedom of the Park”を書いている。

このオーラルヒストリーのプロジェクトは、都市型のオーラルヒストリー・プロジェクトである。また、このような場所と人をオーラルヒストリー・プロジェクトの対象として取り上げること自体に一つの象徴的な意味があると言えよう。オーラルヒストリーの思想が、一般市民の声（過去の声も含め）を擲り上げることに強い社会的意義を感じているならば、スピーカーズ・コーナーは、最も適したオーラルヒストリーの対象と言えよう。

なお、このオーラルヒストリー・プロジェクトは、約1年のもので約30名の演説者へのインタビューを行っている。このプロジェクトでは、オーラルヒストリーだけでなく、演説の音声や

資料も同時に集めており、それらは2014年1月に Bishoosgate Library に保存・公開された。また、2013年12月7日は、Rosa Vilbr, Philip Wolmuth によって Sounds from the Park: An Oral History of Speakers' Corner (On The Record) という小パンフレットが刊行されている (図1参照)¹⁾。

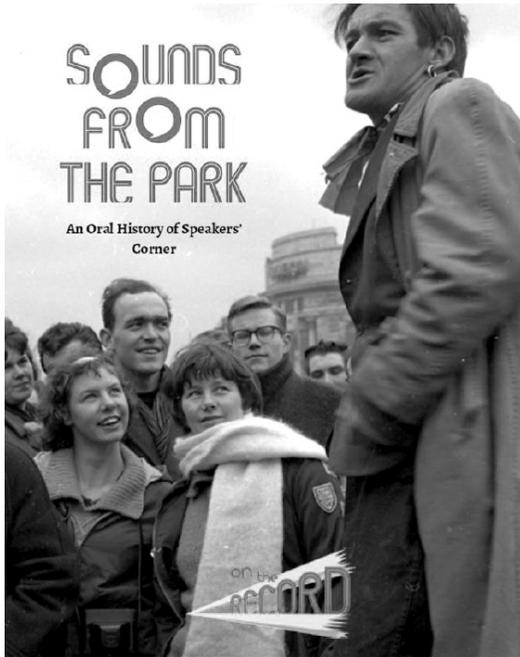


図1 Sounds from the park

実施体制としては、Bishopsgate Library がある Bishopsgate Institute との協力関係を作りながら、Heritage Lottery Fund、the Barry Amiel, Norman Melburn Trust の金銭的支援を受けている。

続いて、このプロジェクトが主催したワークショップについて紹介しよう。私は、2013年12月7日に Bishopsgate Institute Great Hall で開催されたワークショップに参加した。ここには、多くの人々が集まっていた。年配の方が多いと思っていたが、多くの若者たちが参加していることに驚いた。なぜ、若者が多いのかは、プログラムを見てすぐにわかった。高校生が展示とアクティビティをするからである。それらについては

後述する。

順番に説明しよう。会場に入ると、英国らしく紅茶とベーグルのランチタイムであった。ワークショップの前に食事をしたり、休憩時間にクッキーとお茶を飲んだりするのは、参加者の気持ちを和らげる効果があると思う。

続いて、代表者によるオーラルヒストリー・プロジェクトの説明があった。さらに、専門家によるスピーカーズ・コーナーの歴史に関する簡潔な講義があった。この講義があることによって、スピーカーズ・コーナーが英国社会の伝統の一部であることがわかった。

次の発表は、私の興味を惹いた。聴き手となった数名が壇上に立ち、語り手についてときどき物まねを挟みつつ、説明したのである。もちろん、語り口を真似たとしても、私にはそれらが似ているかどうかはわからない。しかし、インタビューを通じて真似するという行為が自然と身についてしまったという感じがあり、聴いていて楽しかった。壇上に上がった人は、どなたも話し慣れているようで、ときどき笑いを生みつつ、わかりやすかった。

ところで、スピーカーズ・コーナーの常連さんはかなり変わった人物が多い。その意味では、このプロジェクトは普通の地域住民をインタビューしているのではなく、都市の有名人(?)をインタビューしていると考えた方がよい。スピーカーズ・コーナーの人物写真集なども販売されていた。

高校生の報告は、スピーカーズ・コーナーの録音音声を編集して作成された音声作品であった。語っている内容は編集され、他の音源と混じっていくので、声の現代アート作品であった。思想家バフチンによる概念に多声性(ポリフォニー)がある²⁾。雑音の中にたくさんの人々の声が反響している学生たちの作品を聴いていると、私は多声性の表現を感じた。

休憩時間を挟んで、各場所に分かれて展示や自由参加のワークショップやアクティビティが行われた。スピーカーズ・コーナーでの演説を実際

に体験するため、一人の演説者が発言し、参加者が賛成や反対の合の手を入れるというアクティビティもあった。他スピーカーズ・コーナーの研究をしている人を囲んで話し合いも生まれていた。さらに学生たちは、先ほど流した音声作品のように、参加者がiPadを使って自由に音声と映像を組み合わせて作品を作ってみるというワークショップを行っていた。

このような参加型のワークショップを行うことで、参加者間の「交流」が深まると言えよう。オーラルヒストリーを素材として様々な加工が可能であることは、私にとって大きな発見であった。

(2) Continuing Professional Development Freelancer's Workshop

フリーランスによるフリーランスのためのワークショップは、2014年1月28日に Foundling Museum の会議室で行われた。つまり、研究者ではなく一市民としてオーラルヒストリーを続けている人が、同じオーラルヒストリアンや今後、オーラルヒストリーを行いたい人を集めて行ったワークショップである。ワークショップについては、OHS のイベント紹介のページで知った。この勉強会は、Sarah Lowry さんがオーラルヒストリアンを集めて行った。約25名が参加し、和気あいあいの雰囲気で行われた。参加者は90%が中年女性であり、男性は、私を含めて4名であった。参加者全員と話したわけではないが、研究者とは会わなかった。

なお、ワークショップには、An Oral History of Speaker's Corner の参加者やロンドン博物館でオーラルヒストリー・プロジェクトを担当する Sarah Gudgin さんも参加していた。ともにフリーランスのオーラルヒストリアンである。すなわち、この場が交流の場になっており、情報交換が行われていた。主な報告は、各自が担当していたオーラルヒストリー・プロジェクトを紹介する形であり、その質疑応答は実に細かい。まず、資金の獲得方法、ボランティアの集め方、地域団体との連携方法、公開方法、さらにインタ

ビューの技法について経験者同士の情報共有が行われていた。例えば、understanding the “real cost”, scheduling the work, agree to a contract including cancellation policy などが報告内のキーワードである。詳細な情報共有としては、例えば資金の獲得だけでなく、助成金の期限が終わった後の継続方法、プロジェクトの締め方まで議論をしている。

ところで、日本でも経験することであるが、オーラルヒストリアンが集まると、各自は自分が行ったオーラルヒストリーを語りたがる。これは英国でも同じで、参加者たちが大いに語っていた。そして、対象は異なるが、お互いの経験は似ているので、苦労話にも「共感の笑い」が生まれていた。数量的に確認したわけではないが、様々なプロジェクトが紹介された中では、コミュニティ・オーラルヒストリーが多かった。

このワークショップでは、オーラルヒストリー経験に差があることを踏まえれば、経験者が未経験者に向けてその経験を丸ごと語る場でもある。この交流の意義は、技法の伝達だけではないと言えよう。確かに展示の工夫の数々、特にドイツの街角博物館におけるオーラルヒストリー展示の紹介などについて、参加者も熱心に質問していたが、最も大きな意義は、先輩の経験がこれからオーラルヒストリー・プロジェクトを立ち上げる人たちへの動機づけになっている点であろう。苦労話とともにプロジェクト経験（時には自慢話？）を聞くと、「私も…いつか…」という思いが生まれるのではないかと思う。ワークショップは途中で紅茶とクッキーの休憩が入り、終了後も交流は続いた。かくいう私も、日本における自分のプロジェクトを紹介し、多くのフリーランスのプロジェクトから動機づけられたのである。

(3) An Oral History of the Foundling Museum

Freelancer's workshop の主催者である Sarah Lowry さんの活動をより詳しく知るために、2014年2月27日に彼女の地元でインタビューを

行った。Sarahさんは、Foundling Museumのオーラルヒストリー・プロジェクト(2009-2011)にスタッフとして参加した。また、彼女は、Freelance oral historian, Oral history trainerと名乗っており、British Libraryのメンバーでもある。

Foundling Museumとは、孤児院・病院の記念館である。孤児のための病院があった場所に設置されている。この記念館では、常設展示として二つの大きなコレクションがある。一つは、Foundling HospitalとFoundling Hospital Schoolの歴史資料である。この病院と学校に滞在し、巣立っていった子供たちは、25,000人にもなる。もう一つは、この孤児院の後援者であったGerald Coke Handel氏が集めた美術品のコレクションである。

Sarahさんは、オーラルヒストリーを基に2011年の4月から10月までFounding Voicesという特別展示を企画した。この企画展では、孤児としてこの孤児病院・孤児学校に在籍した人へのオーラルヒストリーと集めた歴史資料を使った。オーラルヒストリー・プロジェクトは、Heritage Lottery Fundという団体から助成金を受けた。語り手は74名で18か月をかけて行われた。

Sarahさんがこだわりとして話してくれたのが、お金のかからない展示の方法である。彼女は、先のワークショップでもusing your recordings creativelyという報告をしていた。

具体的な事例を紹介しよう。まず、一般的にオーラルヒストリーは、ヘッドフォンを置いて語りを聴く形が多い。Founding Voicesでは、図2が代表的な展示例である。

一方、これに加えて彼女が考えたのは、小さなスピーカーを用意して同時に語りを聴く方法である(図3, 4)。もちろん、一つひとつの語りを正確に把握するのは、この展示では難しい。では、なぜ彼女はこのような展示を行ったのであろうか。これは、大げさに言うならば、一つの過去というテーマを持った芸術ということが出来る。すなわち、多声性の展示の場に来た入場者が、想像

力で補いながら過去を想起する仕組みである。図4は、長く使い込まれた鞆と一緒に語りを聴く展示になっている。これもまた、想像力を刺激する展示と言えよう。さらに、図5は、階段の壁にこの孤児病院・学校に所属した人の名前を壁一面に記している。「語り手以外にも語り手はいた」「語れない経験もある」ということを想像させる展示と言えよう。

なお、Sarahさんは、スピーカーを使った展示は格安の量販店から購入したことを教えてくれた。つまり、工夫をして格安で展示を作ったのである。彼女は、このような工夫がフリーランスのオーラルヒストリアンには必要であることを私に教えてくれたのである。

彼女は、自分が手掛けたプロジェクトを語る中で、経験を伝達できるオーラルヒストリアンたちのネットワークの重要性を語った。また、彼女によれば、ロンドンのオーラルヒストリアンは女性が多く、地域活動の一環としてオーラルヒストリー・プロジェクトを実施している事例が多い。地域活動の主役は、日本に限らず、中高年女性なのだを確認した。さらに彼女は、オーラルヒストリーの訓練は、OHSで行っている訓練プログラムが役立つことを教えてくれた。

4 日本におけるオーラルヒストリーの可能性

本稿では、英国におけるフリーランスのオーラルヒストリー・プロジェクトの活動を紹介してきた。ここで紹介したのは少ない事例であるが、ぜひこの報告を研究者以外のオーラルヒストリーに関心がある人々に読んでほしい。紀要という目に触れる機会が少ない媒体ではあるが、どこかのだれかが、キーワード検索でこの報告にたどり着いてくれるかもしれない。英国の先進例は、そのような人たちに役立つ知識を与えてくれるであろう。

私も、大学のゼミ活動の一環として地域オーラルヒストリーを続けてきた。その報告としては、



図2 展示例①



図3 展示例②



図4 展示例③

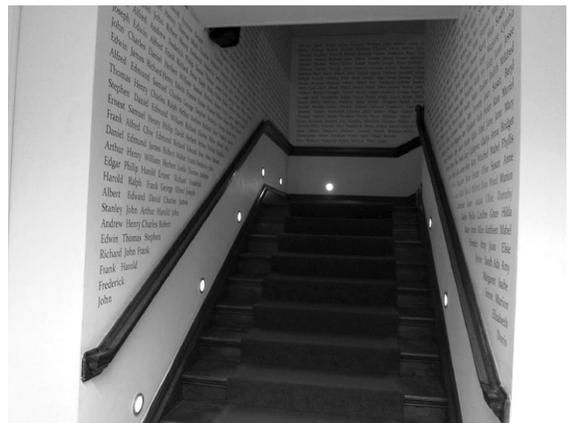


図5 展示例④

「オーラルヒストリーによる地域メディアの可能性—大学生によるタウン誌作成の実践を通じて—」にまとめている。オーラルヒストリーが地域コミュニティに与える影響は、後藤ら（2005）などの試みもあり、ここ数年注目されてきている。

一方、在外研究中に心に浮かんだのは、若者によるオーラルヒストリーではなく、中高年者によ

る地域オーラルヒストリーがこれから必要になるのではないかという思いであった。日本社会は、少子化・高齢化・人口減少が進んでおり、その加速的な進行が予測されているが、なにも暗い未来を想像しなくてもよいのではないかと思った。

オーラルヒストリーによって地域や組織の社会的記憶を集める活動は、そのプロセス自体に意

味がある。私は、英国のフリーランスのオーラルヒストリアンからオーラルヒストリーの新しい側面を教えられた。日本の各地域で、オーラルヒストリーが行われ、若者を交えたワークショップが毎月行われたとしたら、こんなに明るい未来はない。英国での出会いを通して、そう思えてきたし、気持ちも固まった。つまり、自らも中高年の道を歩むに連れて、地域コミュニティで一仕事をしてみたいと思ったのである。ここに記して決意表明としておく。

注

- 1) この冊子は、インターネット上で読むことができる。 <http://soundsfromthepark.on-the-record.org.uk/wp-content/uploads/2013/11/sounds-from-the-park-booklet-website.pdf>
- 2) バフチンの思想については、桑野 (2011) の説明がわかりやすい。

参考文献

- 梅崎修・田口和雄 (2012) 「Regional Oral History Office (ROHO) のオーラルヒストリー・アーカイブについて」『生涯学習とキャリアデザイン』9, pp.75-85
- ・—— (2013) 「コロンビア大学・CCOH (Columbia Center of Oral History) におけるオーラルヒストリー調査とアーカイブについて」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』10, pp.319-338
- ・—— (2014) 「MATRIX (The Center for Digital Humanities and Social Sciences at Michigan State University) におけるオーラルヒストリー・デジタル・アーカイブの試み」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』11, pp.279-296

- 梅崎修・佐藤憲・笈隆太 (2014) 「オーラルヒストリーによる地域メディアの可能性—大学生によるタウン誌作成の実践を通じて—」(未刊行)
- 桑野隆 (2011) 『バフチン—カーニヴァル・対話・笑い』平凡社
- 後藤春彦・田口太郎・佐久間康富 (2005) 『まちづくりオーラルヒストリー—「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く—文化とまちづくり叢書』水曜社
- 酒井順子 (2008) 『市民のオーラル・ヒストリー—歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版部
- 田口和雄・梅崎修 (2012) 「アメリカにおけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の現状について—UCLA Center for Oral History Research (COHR) のインタビュー調査をもとに」『高千穂論叢』47(1) pp.99-119
- ・—— (2013a) 「NYU Tamiment Library & Robert F. Wagner Labor Archives におけるオーラルヒストリーのデジタル・アーカイブ化について」『高千穂論叢』47(4) pp.97-118
- ・—— (2013b) 「The New York Public Library for the Performing Arts and the Ellis Island Immigration Museum におけるオーラルヒストリー・プロジェクトについて」『高千穂学園創立110周年記念論文集Ⅰ』pp.311-323
- ・—— (2014) 「WSU Walter P. Reuther Library and Urban Affairs におけるオーラルヒストリー・プロジェクトとアーカイブの現状について」『高千穂論叢、高千穂学園創立110周年記念論文集Ⅱ』48(3・4), pp.139-162
- Paul Thompson (2000) *The Voice of the Past: Oral History* 3rd. ed. Oxford (酒井順子訳 (2002) 『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』青木書店)。

Oral history in the United Kingdom (1)

An encounter with a freelance oral historian

UMEZAKI Osamu

This report introduces an oral historian's activities in the United Kingdom (UK), which is advanced in the study of oral history and related research. Moreover, many oral histories are recorded by freelancers who are not affiliated with a university. These researchers investigate many oral histories and examine events using this specific historical method.

I participated in a workshop on oral history, and discussed such research methods and activities with a freelancing oral historian. This paper presents the report of my investigations. It is likely that this report will offer good information, which will be useful for a Japanese oral historian.